

## 緑爽会会報 No. 144

2016年6月24日発行  
日本山岳会 緑爽会  
発行人 富澤克禮



デザイン・制作 関塚貞亨

### 代表に就任して

富澤 克禮

4月12日に開催された緑爽会総会で代表を仰せつかりました<sup>とみざわかつのり</sup>富澤克禮です。

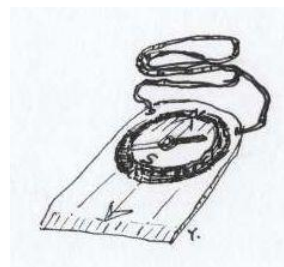
わたくしには、集団や団体を引っ張っていくのに必要な強力なリーダーシップ、積極性はなく、独創性等もあまり無く、山岳団体のリーダーとして必要な華々しい山歴も無く、動植物・地質・気候等に関する専門知識も持ち合わせておりませんし、文才也没有ありません。そのうえ自慢するほどの金も無く、喜寿を迎えたこの歳では、親がいる筈もなく、さらに妻には13年前に先立たれ、それでもまだ、死にたくは無いというのが現在の心境です。

「親も無し、妻無し子無し版本無し、金もなければ死にたくも無し」と蟄居中の心境を嘆き「六無斎」と号した、江戸時代の後期、高山彦九郎・蒲生君平とともに「寛政の三奇人」の一人の経世家の「林子平」の上を行く、「七無斎」「八無斎」の状態です。

そんなわたくしでも、少しは良いところはあるもので、周囲に対する配慮と心配りとサービス精神、周りとの協調性、引き受けたことに対する責任感、人並み以上に持っている積りです。

2007-2010年に自然保護委員会委員長、現在、自然保護委員、東京多摩支部の幹事長・総務委員長を務めており、こまごまとした作業をこなす為に、忙しい毎日を送っております。そんな中、緑爽会代表の役割を果たせるのかとの不安もあります。

これからは、長所を活かし、欠点は皆さまに補っていただきながら、やっていきたいと思っております。錚々たる会員が在籍し、文化の薫り高い活動をしている緑爽会の伝統を守り、発展させるためには、会員皆様一人一人の絶大なるご支援、ご協力が必要ですのでよろしくお願い申し上げます。



### ～～《報告》～～

#### 5月山行 四寸道から関八州見晴台、高山不動尊へ

近藤 雅幸

期日 平成28年5月14日(土)

タイム 火の見下 9:50—横吹峠 10:10—関八州見晴台 12:20~13:10—高山不動尊 13:30—西吾野駅 15:00

四寸道。古くから名刹、高山不動尊に参拝する参道として多くの人に歩かれてきた。この道は大満にある下ヶ戸薬師堂の裏から奥の院に向かい、そこから少し下って高山不動尊に下る。廃道になって久しいが最近では再びハイキングコースとして人気が出てきたと聞く。ツツジの観賞も兼ねて、そんな旧道を歩くことにした。

越生駅からバスに揺られること20分。火の見下バス停で降りるとあたりには長閑な山村風景が広がっている。ようやく濃くなってきた緑の間を抜けると、道は峠を越えて龍ヶ谷に抜ける間道に入る。登りがきつくなると、横吹峠である。ここから左に折れて奥の院のある関八州見晴台から延びる尾根に入る。四寸道である。いかにも昔の参道らしく、道は大きく溝状に掘れている。四寸道は尾根上のピーク、越生駒ヶ岳の左を巻くように高度を上げていく。再び尾根上に出たところから越生駒ヶ岳に登ったが、そこは展望もなく、花もなく、三角点しかない場所だった。

越生駒ヶ岳を往復した後は再び四寸道に行く。さすが昔の参道。うまく道がつけてあってとても歩きやすい。猿岩林道を渡って、さらに高さを上げていくともう一度猿岩林道に飛び出る。そこからは林道を10分ほど左に歩くと、右手の森の中に道が見える。ここからヒノキ林の中の急登を何とかこなして奥武蔵主稜線。それを右に向かうと、間もなく春の明るさにあふれた頂上にたどり着いた。遠くが靄っているが、長沢背稜や武甲山、伊豆が岳は手に取るように眺められる。ここで昼餉を取り、ゆっくりと春の色彩を楽しむことにする。

休んだ後は高山不動尊に下る。ミツバツツジはすっかり終わり、ヤマツツジもちらほらとあるだけだ。高山不動尊でお不動様を拝んだ後、もう一つの三角点、虚空蔵山に向かったが、地権者とみられる人が来て入るなどのお叱り。仕方なく、登山道を大窪へ下った。明るい日差しの中、大窪集落の高みにある神社の木陰で休んでいると「春」の真ただ中にいることがひしひしと感じられる。さらに大窪峠を越えると視界が広がり、眼下には西武秩父線が走っているのが見えてくる。西吾野駅はそこから20分ほど。駅下の売店で買った缶ビールのうまさはこれまた格別だった。

## ・横関 邦子

久しぶりの山歩き。仕事も忙しくなかなか参加できないでいたので、ワクワクしながらも、少し心配。みんなについて行かれるかしら、緑爽会の初めてのメンバーなので、迷惑かけないかしらと・・・。

越生の駅に集合し、7名で出発。バスで登山口まで行く途中、越生の梅林の横を通る。以前ここに来たときは、梅の時期で、白、赤、ピンクの梅の花があちこちに咲き、大勢の人が梅の木の下を散策していた。今日は、5月。新緑がとてもきれいで、白の梅の木も、赤の梅の木も、ピンクの梅の木もその境がわからないほど緑の葉におおわれている。まだ梅の実は、小さいのか、色が緑で葉と同化しているのか、バスからはわからない。

バスを降りて、10時少し過ぎに登りの道を歩き始める。カンカン照りでもなく、薄い雲のかかった天気、山歩きにはちょうど良く、見上げると木々の新緑と、足元には春の草花が静かに咲いている。関八州見晴らし台までは、枯れ葉がかぶさった道、間引いたひのき枝が散らばった道、雨水が流れたのか真中がへこんだ道などの登りが続く。途中、黒山三滝などの分かれ道を通り、汗をかいて歩いていると、時々爽やかな風吹いてくる。12時近くなり、おなかがグーとなってきたエネルギー切れだ。頂上はまだかなあと思っていると、オレンジ色の山つつじがあちこちに咲いた関八州見晴台に到着。標高は771.1メートル。つつじは、そろそろ終わりのころだが、遠くの山並みが幾重にもつながった素晴らしい景色だ。

この見晴台の名前の通り、最高の天気であれば、安房、上野、下野、佐上、武蔵、上総、下総、常陸の関東の八州を眺めることができるとのこと。東京のスカイツリー、富士山や筑波山なども見えるらしいが、今日は薄い雲がかかっていて遠くは見えない。近くの武甲山と両神山はその姿を見せていた。この山頂には高山不動奥の院があり、鶯の声を聞きながらお昼の休憩。蕨などの山菜もあり、春を満喫。

帰り道は、一気に下る。途中、真言宗智山派の寺院であり、関東三大不動高山不動による。太い木を使った素朴であるが、堂々とした建物だ。頂上に別院があったが、山の中によくこんなに大きな、立派な建物を作ったものだと思う。使ってある一枚板の厚さや大きさにびっくり。





ここから西吾野の駅まで直行。駅近くの店で冷えた缶ビールを買い、電車の待ち時間に無事の山行に感謝して、乾杯。一汗かいた後のビールは、格別。

今日5月14日は、ちょうど私の誕生日。そんな話をしたら、駅のホームでみんながHappy Birthdayを歌ってくれた。山歩きも楽しかったけれど、素敵な誕生日となった。

皆さま、ありがとうございました。

**参加者(7名):** 左から一瀬戸英隆、横関邦子(手前)、西谷可江、渡部温子、大島洋子、西谷隆亘、近藤雅幸

## 6月山行 芦ノ湖西岸歩道を歩く

渡部 温子

**期日** 平成28年6月11日(土)

朝は電車の中から、帰りはバスの窓から富士山が見えていて、本当に爽やかなハイキング日和でした。あの波打ち際をくねくねと歩くのは、しんどいなあと心中思っていたのですが、一步コースに入ると、湖面から大分上方に手入れの行き届いた遊歩道に代わっており、案内板には、距離と時間まで表示され、おまけにベンチまで有ったりして、用意した地図は見る事がなかった(これが最後まで遅れの問題になる)。この遊歩道は、四季折々に心配なく歩けそうでした。

10時5分過ぎに箱根町を出発、道草をしたため白浜には下りず真田浜を目指す。草花は過ぎていたが木々の花々は真っ盛り、熟した木苺の路が続き食べ放題。真田浜で流木を木陰に運んで昼食、大観山、二子山、駒ヶ岳、神山と展望が良く、中村さんはスケッチをしていました。樹々の間からも、何時もとは違う対岸の景観や行き交う海賊船・釣り船などが間近に見られたが、モーターボートの音だけは頂けない。立岩14時55分通過、深良水門、湖尻水門を経て桃源台発のバスに乗車したのは発車2分前、渋滞で遅れたが16時45分ごろに湯本着、解散。最後に、「ここは環境庁でなく林野庁なんだ、納得」と言っていた平野さんの一言が印象に残りました。歩き初めに伐採跡地、最後は車道歩きを(湖尻新橋を渡らなかった為)地図を読まなかった私のミス、ごめんなさい。



鈴なりのおいしいモミジイチゴを摘んで



真田浜にて

**参加者(8名):** 左から一島田稔、松本恒廣、富澤克禮、渡部温子、平野紀子、田井具世、小原茂延、撮影一中村好至恵

## 初めてのネパールトレッキングの頃

福田 光子(秋田支部)

1 ドルが360円の固定相場から少し変わり始め、「夢は？」と聞かれると「海外旅行！」と答えられる頃、突然舞い込んだネパールトレッキングの誘いに、運よく私は参加出来ることになった。1976年、秋の事である。

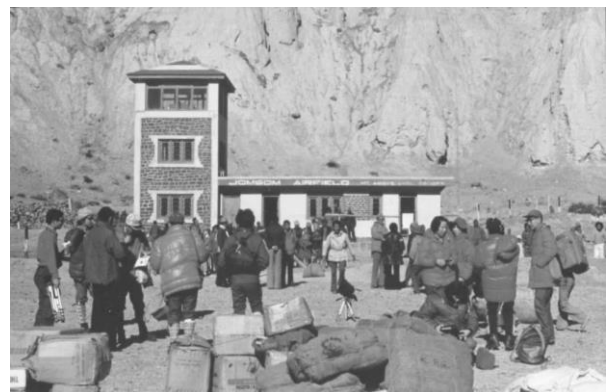
ネパールと言えばヒマラヤの国マナスル、エベレスト、ナムチェバザールは知っていてもカリ・ガンダキもムクチナートもあまり良く知らず、ただネパールに行けるというワクワク感だけだった。職場での渡航許可願いから始まりパスポートの取得、痘瘡やコレラの予防注射など帰国するまで初体験のオンパレードが連なる海外渡航でした（まだ予防注射施行済の証明書添付の義務があった）。

1976年12月26日、予習が少ないまま羽田に集合、集まったJAC図書委員会のメンバーとも初めてお会いする会員ばかりでした（秋田市からは北林嘉鶴子氏：JAC7584と2人）。挨拶を交わし仲間に入れて頂けたお礼を述べると、不安は一つ解消し機上の人となった。飛行機は満席状態、少し窮屈だった。戒厳令下のバンコック経由で乗り換え、蒼い空と乾いた空気のカトマンズ空港に降りると小さな空港には溢れるほどの人並と独特の臭い、「ここは外国なんだ」と自覚する。

タクシーで宿に向かう。トヨタの中古車の運転手は車を撫でまわし「ジャパン！」とにこやかにそして得意げにハンドルを握っていた。私たちの宿泊はカトマンズの少し郊外、閑静な緑の中で、日本人の経営する「コテージ・オーロラ」、貸切りなので安心だ。午後からはトレッキングパーミッションの取得や、買い物などのトレッキングの準備。

まず、ドル紙幣をネパールの通貨に換金する。レートは1円が25ルピー、薄汚いルピー紙幣を一枚一枚丁寧に裏返し点検してから渡していた。

ネパールを数回経験しているリーダーの案内でバザールを回る。薬缶を購入するが、石を錘にした天秤量りで値段を決めるのが面白い。売り手の言いなりには決してならず値切るのがルールだ。12月28日 ネパール時間の「ビスタリー」に惑わされることもなく予定通りジョムソンに向けてフライト出来たのは幸運だった。ジョムソン空港は、空港とは名ばかりの赤茶けた荒涼とした河原の一角、カリ・ガンダキの谷間に急下降して着陸した。ジョムソンには軍隊が駐屯している。トレッキングパーミッションのチェックを受けて、午後、いよいよ自分の足で歩くトレッキングが始まる。カトマンズとはまるで違う風景の中に突入していく。上流に行くにしたがい河原は次第に広がる。もうチベット圏内のカクベニという村はずれが今日のキャンプ地となる。チョルテンと白い旗の幟が目印で、夕やみ迫る頃到着するとシエルパやポーター達は既に設営している。村人や子供たちが遠巻きに珍しそうに眺めている。衣類は汚れて、どことなく遠慮がちな様子は、日本の山村の幼き日の自分の姿に重なった。



—ジョムソン空港—

歩き始めて間もなく頭痛がしてきた。カトマンズが標高1300m、2743mのジョムソンと急激な高度変化に慣れていない高山病の始まりかもしれない。翌朝は一晩過ぎたせいか頭痛は少しか楽になっていた。

キッチンボーイの「ナマステイー、チャー」の声で目覚め、ミルクティとお湯のサービスで一日が始まる。朝食もそこそこに行動開始。

今日の予定はムクチナートを往復しジョムソンまで戻るロングコースだ。ムクチナートまでは標高差 1000m を登り続けるコース。高原砂漠をひたすら登る。蒼い空に映えるダウラギリ、ニルギリなどヒマラヤの白い山脈を眺めているが、頭痛を友にしているので感動的とは言えない。ヤクに荷物を積んだチベットの隊商と「ナマステイー」とひとつ覚えのネパール語を交わすのが心を和ませてくれる。

ただ前に進むだけ、荒涼とした中に緑の一角が現れ、そこがヒンズー教の聖地ムクチナートだった。昔から多くの巡礼者が訪れているところだ。ちょっとだけ覗いて到着最高地点を後にする。とにかく一歩でも早く、少しでも低い所に戻り頭痛から解放されたいと急ぎ足で下る。どの位下ったのか、気が付いたら頭痛は回復していた。が、今度は靴擦れで足が痛い。夕やみ迫る頃カクベニのキャンプ地に戻るとコックがじゃが芋を煮て待っていてくれた。素朴な味だが溶けるように美味しく疲れが癒される。まだジョムソンまで数 km ある。サーダーは「強行過ぎる」と主張したが、予定通りに日程をこなすにはどうしてもそうしなければならないのだ。急いでジョムソンに向かう。風も冷たくすでに月はのぼり足元を照らしてくれる。まさにヒマラヤの夜あるきだ。ジョムソンでは茶屋に宿泊、「南京虫や蚤、シラミが付くよ」と脅されたがその心配は当たらなかった。

29 日、朝焼けのニルギリ三山を後に出発、昨日出来た靴擦れがヒリヒリする。リーダーも靴擦れをしていた。どんなに痛くても自分の足を運ぶだけだ。マルファやツクチェの街並みは整然と簡易水道も引かれている。隊商で栄えたこの町も冬期は出稼ぎとかで、シーンと静まりかえっている。町の出入口ではチョルテンと積み上げられたマニ石が人々の平安を守っている。ツクチェから 2 km ばかりある河原はまるで砂漠のようで、カリ・ガンダキの午後は強風に悩まされる。ダウラギリ風ということか！ゴーグルやフードの隙間から容赦なく砂塵が入りジャリジャリする。みんな一緒に出発したはずがいつの間にか二人になっていた。

やがて樹林帯となる頃、風も収まりホッとす。もう日暮れも近い。樹林帯の上のアンナプルナが月に照らされた頃一軒家に到着、チベットの家族が夕食をしていた。今宵はここでお世話になることに。小さな囲炉裏を囲み夕食を済ませる。言葉は通じないが不安もなく一夜を明かした。

トレッキング 4 日目は大晦日、今日の予定はタトパニまで、これもかなり長い距離だ。山の上から夜明けが始まるヒマラヤ、高い山から次第に下へ下へと明けてくる。今日も快晴、景色も昨日までのチベット風の様子から、緑が多く趣を変えた。道も道らしくなり、トレッキングは山登りでなく、住民の生活道路を歩くのだから、何もゴツツイ登山靴でなくても良かったのだと漸く気が付く。足の痛みにも慣れたからかもしれない。

これからは上り下りの標高差が激しくなりそうだ。ガサという集落、家々の屋根にも幾分傾斜が付く、日当たりの良い庭先では婦人が機織りや糸紡ぎをし子供時代の生まれ故郷と何等変わらない、同じ農耕民族なのだと親しみを感ずる。

ヒラリースクールもあるこの町は明るかった。いつの間にか近藤夫妻と自分の三名グループになっていた。この辺りのカリ・ガンダキは溪谷がもっとも狭い所とか、右岸の道は廊下状の絶壁にトラバースするようにつけられている。眼下のカリ・ガンダキは轟音をたて恐ろしいくらいだ。タトパニ着 19 時。今日もライトをつけての夜歩きとなった。ここで漸く当初の日程に追いついたことになる。「トレッキングの意味をはき違えているのではないの？」「夜道で見えない所を見たかったね」など話のタネにして大笑い。月明かりに照らされるニルギリを仰ぎながらの大晦日の遅い夕餉は年越しそば、シエルパやポーター達も大晦日の宴を遅くまで楽しんでた。

元旦はお雑煮で始まる。タトパニとは熱いお湯、つまり温泉のある所という意味だ。この温泉を楽しみにして来たメンバーもいたがその時間はない。

部落の外れで平尾さんの経営するスルジュ館に立ち寄る。平尾さんはトレッキングの途中、宿の主スルジュさんに懇願され結婚してこの地に住むようになったとか、「ヒマラヤの花嫁」の著者である。

今日の行程はシーカまで1000mの登りだ。尾根に沿って山々の上まで民家が並び、周囲は青々とした段々畑が連なっている。田園風景を楽しみながらビスタリズム、昨日とは違ってみんなの会話も和気あいあいとしている。午後2時シーカに着く。

トレッキング始まって以来初めて明るいうちにキャンプ地に到着。水道や診療所もあり、店の女の子は「Mr. 川喜田」としき

りに口にし、我々を歓迎してくれた。川喜田二郎氏はこの地に荷物運搬のロープウェイを開発援助し部落民から大変尊敬されていた（日ネ協会の会長を長く務めた人でもある）。ここで私はメイドインチャイナのズックを30ルピー（約750円）で購入する。少し高いかなと思ったが、足が軽くて歩きやすくなる。

キャンプ地は学校の裏側で、ダウラギリが大きく威厳を正して望まれる所だった。時間がたっぷりあり住民とも交流し、トレッキングらしい日となった。

翌日はここから850m登り、ゴラパニ峠（2700m）へ向かう。ラリーグラス（シャクナゲのことでネパールの国花）が見事な樹林帯の峠だ。今度はウレリという山の上の集落から標高差で1500mもの長い長い下り、石段だけでもたっぷり1時間を要した。足の筋肉がバラバラになったところキャンプ地に到着する。トレッキングを楽しみながらもそろそろ疲れも蓄積している1月3日はモデイコーラの出合いへ下り、今度はチャンドラコットの峠まで2時間の登りと厳しい標高差を体験するはめに。峠の大きな菩提樹はチョウタラという休憩場所になっている。どちらから歩いても大きな登り下りを繰り返してきた隊商たちにも何よりもゆっくりできるところのようだ。動物も住民もトレッカーものんびりと休憩している。

展望も良くアンナプルナ南峰も大きい。魚の尻尾のマチャプチャレも凛として美しい。ここで思いもかけず、JAC 越後支部の藤島玄氏一行と会う。ゴラパニ峠まで行くそうだ。国内でもめったに会えないのに、外国でお会いするとは、一同奇遇に感無量！ところが、我々が利用している航空会社「エアーサイアムが倒産した」と教えられた。びっくり！当時の自分は航空機会社が倒産するなどは全く考えつかないことだった。

しかし、現実にあったのだ。仲間のO氏は「サイアムの事だから危ないと考えてはいたが、3月頃までは大丈夫かなと思っていた。それでも旅行保険は数日分多くかけてきた」と笑っていた。自分では何も出来ないが、心強い仲間がいるので何とかなるだろうとあまり気にもかけずトレッキングを楽しんでいたが、この倒産事件は我々の帰国に今後大きな影響を与えることになる。

いくつもの集落を越えてノーダラに到着。アンナプルナやマナスル三山を眺め、部落外れの丘を最後のキャンプ地とする。今夜も月が美しく輝いていた。シエルパは最高のキャンプ地を選んでくれたと感心する。



—タトパニにてメンバー全員— 後列左から 鈴木実 油谷次康 近藤信行  
山本良三 福島 大橋晋 一人おいて福田 サーダー 伊藤博夫 河野悠二  
中間左より近藤緑 北島光子 北林 河村ドクター 大森久雄



最終日は明日の飛行機のチケットを確認するため、福島氏とみんなより早く出発ポカラに向かう。スイケットまでの下りも長かったが、あっという間に下り広い河原道に出た。街並みも立派になってきた。朝早いので登校する子供たちと一緒に。みんな「ナマスティー」とにこやかに声をかけていく。ミドルスクールという英語の本を見せてくれた子供がいたが、かなりレベルの高いものだった。学校に行けるこの子たちは裕福で恵まれているのだと……。同じ子供でも弟妹達の子守や作業をしていた奥地のこどもたちの様子が思い出された。

12時20分、ポカラ空港で明日のフライトの確認を取り任務を終える。空港前のレストランで摂った昼食は久々の都会の味がした。午後は空港前で空を眺め、ぼんやりと昼寝をしながら仲間を待つ。空港前のホテルの中庭にテント泊。ネパール餃子のモモとビールで打ち上げ。最終日の5日、荷物を整理してポカラの休日を楽しみ、11時40分フライト、ヒマラヤに別れを告げる。

9日ぶりにカトマンズに戻った我々をオーロラの未知ちゃんが迎えてくれた。トレッキング中は汗や汚れも気にならず入浴も忘れ、ネパール人になったつもりだったが、飛行機や車に乗ると急に汗の臭いが気になりだした。シャワーで汗を流し、奥さんが用意してくれた巻寿司のご馳走は忘れられない美味しさだった。

1月10日からはカトマンズ市内、パタン、スワヤンブナート、バザールなどを回り観光とショッピングを楽しむ、車は多く傍若無人に走り回るし、動物も人も一緒のカトマンズには信号機が三台だけとか。「こんなところで交通事故に遭ったら轢かれ損だからくれぐれも注意なさい」と促された。天候悪化がなかったので、早朝、エベレストの観光フライトに行く。小型機がエベレストの直前でターンするきわどい飛行で、アマダブラムもローツエも目に入らず、三角錐のエベレストが印象に残っているだけだ。

予定通りカトマンズを後に帰国の途に付く。バンコックでは観光も含めて二泊を予約していたのでそこまでは順調だった。しかし、例のサイアム倒産で我々の予約便はない。ここで飛行機を予約し、チケットは自分たちで確保しなければならないが、多人数であること、年末年始の休暇を海外で過ごした人の帰国時期とも重なっているのどこも満席状態、毎日空港に通ってもなかなか予約できない。お仕事の都合上どうしても急いで帰国しなければならないドクター等数人は何とかチケットを購入して先に帰国していった。自分も休暇も終わるし気にはなったが何もできないので、外国事情に慣れているメンバーのお世話になることに……。それからの数日間は与えられたホテルで与えられた食事ですぐに帰国の日を待つことになる。味気ない三日間を過ごし、有り金を集めて漸くチケットを入手、羽田行の飛行機に乗ることが出来た時の安心感も忘れられない記憶となった。

こうして私の初の海外旅行は、おまけの体験も加わり、より思い出深いものとなった。

あれから40年、当時ご一緒させて頂きお世話になった先輩たちに親しく交流させて頂き多くを学び、私のJACクラブライフは今に続いている。



－帰国の前日コテージ・オーロラの中庭で－  
後列左より大森久雄 北林嘉鶴子 福田  
近藤緑 前列左は大橋晋 右北島光子

＊「緑爽会会報 No.141、5ページ『プレム・ラタさんのこと』」を併せてご覧ください。(編集子)

## スプリング・エフェメラル

樋口 みな子(北海道支部)

カタクリやエゾエンゴサクなどをスプリング・エフェメラルと呼びます。

春のはかなきもの。美しいことばですね。札幌から1時間もかからない小さな森にサファイアのようなエゾエンゴサクと、可憐で奥ゆかしさを感じるカタクリが一面に広がっていました。

花の下に落ちたカタクリの種を、アリがせっせと運んで広げていったのです。カタクリが花を咲かせるのに8年かかり、まるで天国のような群落を作ったと知ったときの感動を忘れることができません。以来、毎年カタクリの季節になると、GWを外して見に行くのが恒例になりました。

旭川の突硝山のカタクリの群落は氷河期を経て1万年かかったそうです。



大雪山・姿見の池にて



カタクリ



キクザキイチゲ

## 渋沢丘陵 巨大霊園開発

中村 好至恵

### はじめに

緑爽会の3月山行で訪れた八国見山(319m)を最高点とする渋沢丘陵は、南10kmほどに相模湾、北は丹沢山塊に連なる場所に位置し、大磯丘陵の一部を成している。秦野からのハイキングコースとなっている震生湖からも遠くはないが、渋沢丘陵自体の知名度はさほど高くなく、地元の自然観察愛好家が足繁く通う、手つかずの本来の里山としての豊かな自然が保たれていた。且つ、上記のような地理的環境から里山のみならず山岳性の生き物、海辺の植物(例:モクレイシ)など多様な生態系が維持されており、また中村川の源流を急峻な地形の谷間にいただくことで湿潤な環境にも恵まれ、他に類のない貴重で多様な生物が生息する丘陵地帯であった。

……と過去形で書かねばならないことに胸を痛めるばかりです。この丘陵に、15,000基の墓石が並ぶという東京ドーム4.5個分の巨大霊園開発がどのように行われているのかの概要を記します。

### 渋沢丘陵・開発の経緯など

神奈川県は2009年に自然環境が特に優れているとして、大磯丘陵に連なる渋沢丘陵を環境評価書で「A1・1級緑地」と評価し、また環境省も「里地里山保全モデル地域」に選定しました。しかし、県自ら評価したそのような場所であるにもかかわらず、公益財団法人Sを事業者として立てて開発申請に持ち込みます。そして、4名の県職員OBをこの法人および関連企業に役員として就任させ、工事全体を掌握し推し進めているのです。

公益財団法人に許される霊園開発は20haを超えてはならないと県土地利用調整条例で定められていますが、駐車場用地を加えると20ha超になってしまうため、県は20haを超える分を除外し



て許可を出しました。こうした‘小細工’は工事を進めようとしていく中でのほんの一例で、霊園開発計画が公になる以前から用地取得のための名義変更では不審なやり取りを重ねていました。

また、秦野市との事前協議が整っていないにもかかわらず、「県水源環境保全課事務局が了（OK）としている」の報告をしたり、森林法に基づく林地開発許可の可否協議では、秦野市長の意見未聴取であるにもかかわらず「秦野市長に照会したが、特段の意見はないと回答があった」と虚偽の記載をする等など、その他不正行為が数多くあります。

自然保護云々を持ち出すまでもなく、そこで生きている無数の生命は、こうした行政の‘策略’や欲まみれの役人や業者、それに関わる人間の‘犠牲’になってしまうのです。いくら法的な対抗措置を取り続けても虚しいほどに県や市からの回答は人を喰ったおざなりなもので、ここでも「当初より開発ありき」で全てが進められているのが分かります。

### 貴重な里山

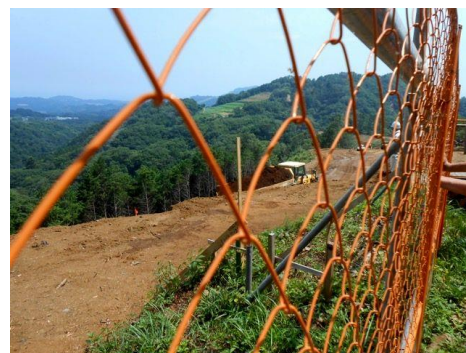
「神奈川昆虫談話会」の齋藤理さんは渋沢丘陵に生息する甲虫の調査を根気強く続けてきましたが、その結果、1800 以上という驚異的な種数や、県内で何十年以上も報告のなかった絶滅危惧種に匹敵するような種が次々と観察されました。その気の遠くなるような作業によって、甲虫という小さくて地味な生き物ではありますが、渋沢丘陵の特殊性と貴重さが見事に証明されたのです。ところが、すでに齋藤さんが調査した場所は赤裸のむき出しと成り果て、取り返しのつかない事になっています。

オオムラサキが好んで産卵していたエノキのあった場所も同様、人の背丈以上の大きなタイヤのついた超大型掘削機械で、豊かな森が赤子の手をひねるように崩されていきます。工事現場を見ると、そうした超ド級の大型機械を寝かせておいては採算が取れないので、それを動かすための工事ではないか？ といった本末転倒な事態も有り得るだろうと感じます。ノスリ、オオタカなどの猛禽類も飛翔し、ノスリは営巣するものもありましたが、もう難しいでしょう。

### 「渋沢丘陵を考える会(\*)」はこれからも活動 (\*：以下「当会」)

すでに工事は着々と進行しています。当会のホームページの「トピックス」欄の下にある「丘陵の破壊状況」を見ると、定点撮影やドローン撮影した破壊の経過が一目瞭然です。インターネットをご利用になれる方はどうぞ一度ご覧になってみてください。また、YouTube では、当会々員のビデオ作家が制作した「これで良いのか！ 里山破壊」が見られます。

上述のように、日本中、いや世界中至る所で行われているこうした破壊や不正のひとつとして、丹沢の足元の現実を少しでもご理解頂けたら幸いです。



鬱蒼とした雑木林が赤裸になった

### おわりに

いわゆる墓地の需要減少は今や周知の事実です。この背景にあって、先祖代々の墓を新たに求める人は多くないのではないかと考えます。例えば、この法人がすでに販売している愛甲郡愛川町の霊園墓地は、横浜市広報でも度々広告を目にしていますが、相当数売れ残っています。

百歩譲って、もし霊園を造るのであれば「樹木葬」など、もう少し違う形のものは出来なかったのか…など、残念な思いがあります。当会では、こうした破壊的な工事をせずとも、遠くない場所に霊園造成に適した代替え地のあることも提示してきました。しかし、この渋沢丘陵という自然豊

かな土地が 墓石を並べての霊園販売として利潤のサイクルに嵌めこまれ、水面下で長年練られた結果の大規模開発は、一部の住民や弱小な市民団体などの意見や抵抗など気に留めることもなく、破壊を進めているのです。が、このような墓地を買う人が今後どれほど居るのでしょうか？

**お知らせ**—「渋沢丘陵を考える会」では毎月第2日曜日に観察会を行なっています。小田急小田原線「渋沢駅」午前9時改札口集合で、どなたでもご参加いただけます。破壊進行中とはいえ八国見山周辺など、まだ自然は残っていますし、当会では諦めずに工事を見張り続ける方針で頑張っています。(観察会についてのお問い合わせは当会、日置まで。☎0463-88-3036)

～～《予告など》～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

7月例会 12日(火) 14:00 集会室 進行:富澤克禮  
講演: 南川金一会員 「知られざる山・道なき山を訪ね歩く—『続 山頂渉猟』に寄せて」  
暑気払い——会費:500円 差し入れ歓迎!  
申込み:7月10日までに夏原寿一へ  
\*南川さんには当日、『続 山頂渉猟—知られざる山・道なき山』(白川書房発行)を何冊かお持ちいただくようお願いしております。2000円+税のところ、1800円(税なし)でよろしいそうです。

8月 お休みです。

9月山行 29日(木) 天覧山～多峯主山 担当:瀬戸英隆、夏原寿一  
詳細は、次号でお知らせします。

10月例会 上旬 18:00時 104号室  
穴田雪江さんに、「武田久吉と一緒に歩いた尾瀬」と題した思い出話をさせていただきます。  
詳細は、次号でお知らせします。  
\*この件は、会報『山』にも掲載します。

退会 山口悠紀子(No.9894)  
手塚照子(No.15582)



―― 編集後記 ―――

『代表に就任して』に「文化の薫り高い活動を・・・」とある。心しておきたい。  
福田さんは、前掲『プレム・ラタさんのこと』に登場しておられる。そこに目の留まった渡部さんが、「当時の思い出話を」とお願いしてこの記事が生まれた。結びの一文に、大切な宝をJACで見つけた、との思いが感じられる。  
樋口さんは、前号掲示の「首都圏から遠く離れた地域に・・・」に早速応えて、北海道の春を届けて下さった。そこには、花々が咲き揃うまでの道のりも書かれている。自然は不思議なものだと思ふ。 (夏原寿一)

記事内の写真筆者撮影、カット:中村好至恵 写真:夏原寿一